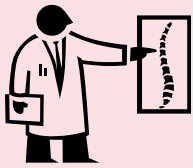


伊藤外科ニュース



82号

2011. 3 発行

寒暖の差の激しい季節ですね。昨日は気温が20度になり、セーターが暑く感じられましたが、本日はみぞれ混じりの雨模様で本当にビックリしています。

この様な天候の時には、ピークは過ぎましたがインフルエンザや風邪、急性胃腸炎の患者さんと花粉症に悩まされる方が来院されます。今年のインフルエンザの患者さんは、高い熱を伴わず、鼻水の多い方もあり診断に迷うことがありました。



10年を過ごし思うこと

さて、私が母校の慈恵医大附属病院を退職して、伊藤外科の院長になって早いもので10年が経ちました。

当初は専門の消化器を主体とした医療を行ってゆこうと考えていましたが、患者さんの病気は多種多様であり、現場で対処している間に、総合医として自分自身は町に貢献してみたいと考えました。幸い、私が医師として育った環境は、内科外科を問わず様々な経験を積極的に積みせてもらえる状況でした。そこで得た経験がとても役に立っています。

また、東京は医師が勉強する上でとても便利であり、専門の医師と知り合ったり、素晴らしい講演を聴く機会が多くあり診療する上で有用です。

私は、町の診療所である伊藤外科で、風邪、腹痛、肺炎などの急性の疾患、高血圧、糖尿病や胃潰瘍などの慢性疾患と整形疾患の診療しております。その治療を通じて多くの患者さん

と接することができ、信頼できる医師たちとも知り合えることができました。

医療は、一つの診療機関では完結できないことも多くあります。伊藤外科で働きながら得た医師のネットワークを利用しながら患者さんにより良質な治療ができればと思っている今日この頃です。



胸痛のはなし

今回は、胸の痛みについて少々話します。

胸痛を訴えて見える患者さんは比較的多いようです。問診や診察をしながら原因を考えてゆくわけですが、やはり心臓の病気を見落とさないように気を付けています。

胸痛の原因の約4割は整形外科領域の疾患であるようです。体を動かしたときに痛みが増したり、痛みの部位がはっきりしている場合が多いです。一方で、狭心症や心筋梗塞、胸部大動脈解離、の患者さんは、年に数名ですが歩いて来院されます。救急外来ではないわけですから当初それほど重症感がありません。待合室で顔色が悪くなって看護婦さんが気付く事もあります。

このような患者さんの多くは、高血圧、コレステロール、糖尿病の治療歴があったり、喫煙者が多い事がわかっています。以上のような条件は動脈硬化を進行させるためです。安静時に嫌な胸の痛みを比較的長く感じたり、冷や汗が出るような痛みを自覚する場合は心臓のトラブルを考えて早めに医師を受診なさると良いと思います。

我が家の近くの小さな公園にある梅はだいぶ咲き始めました。朝、その色と微かな香りを楽しみつつ春を待つ今日この頃です。皆さんもご自愛されて下さい。

(院長)





今回の一冊

四千万歩の男 忠敬の行き方

井上ひさし著

昭和4年生まれの三弓の本棚には、明治・大正・昭和・平成それぞれの時代の作家の本が並べられている。ざっと見ていくと、昭和から平成にかけて活動した作家のなかで、作品点数が多いのは司馬遼太郎と井上ひさし。意見の相違は別としても、それぞれにその発言と作品が気になる作家だったことは違いないだろう。

今回、ひょいと手に取ったのは伊能忠敬を扱った井上ひさしの本である。伊能忠敬——江戸後期、史上初の日本地図を完成させた偉業の人である。アレ？ 確か、千葉の人だよなあ、と思って調べてみると、三弓の生まれ故郷からわずか10キロほどしか離れていない、九十九里浜の小関(現・千葉県山武郡九十九里町小関)出身だった。

「偉業の人」とたった4文字で書いたが、この御仁、なにかと「とんでもない」ですよ。豪商の婿養子として資産を5倍以上に増やして隠居したのが50歳。それから江戸に出て、19歳年下の天文学者・高橋至時に弟子入り。天文学にはかなり以前から興味があったようだが、「人生50年」の時代、そっからのスタートですから。さらに、単なる趣味に終わらず、56歳にして「地図制作のための実測による測量」を始める。この時代の実測といえば、「一步一步、歩く」歩測である。これを72歳まで17年間続けて、ついには日本全国の海岸線の実測を完結させたのである。歩いた距離は8300里——3万5000キロ。「二歩で一間」として、歩いた歩数がテクテク・テクテク4000万歩!! 万歩計の目標値1万歩を365日、1日も休まず11年近く歩き続けるのと同じという、これまた「愚直」としかいいようのない偉業である。

井上ひさしが小説の題材に「伊能忠敬」を選んだのには、いくつかのワケがある。ひとつは、氏自身が変質的な地図好きであるということ。もうひとつは、定年から退職金を食いつぶしていたら寿命が来る時代と違って、かなり真剣に「第二の人生」の生き方を考えなくていけない時代になったこと。そしてもうひとつは、NHK大河ドラマの原作を狙ったらしい。

なぜ、こんな裏話的なことを知っているかというと、ワタクシがひょいと手にとったこの本、小説のほうじゃなくて、副読本だったのであります。小説のほうは、「愚直な一步一步」に敬意を表し、忠敬が毎日書き残した日誌を忠実に再現し、かつ、井上ひさしならではの物語の仕掛けをも盛り込むという「とんでもない」ことをしたおかげで、歩き始めた1年目を描くのに5年を費やし、原稿用紙四千枚を超える長編歴史小説になってしまったとか。本当は、忠敬の死後、完成した日本地図がシーボルト事件に巻き込まれているところまでを描きたかったらしいが、同じ密度で書き続けると125歳までかかるということがわかり、「蝦夷編」「伊豆編」でとりあえず筆を置いている。小説『四千万歩の男』は講談社文庫で全5巻。「四十にして迷わず」ならぬ、「五十にしておおいに迷う」ことになったら、読んでみるかな。

(一弓)